39

『史記』扁鵲倉公伝の幻雲注所引の『難経』について

宮川浩也

室町時代後期の初めに成立した幻雲（月舟寿桂、一四六〇―一五三三）による『史記』への書き入れ（以下幻雲注と略す）の中から、詳細に付された扁鵲倉公伝の引用医書のひとつ『難経』について、引用注家と引用回数、さらにいくつかの問題点に触れる（順不同）。

①呂広注　佚（引用回数一一回）

②楊玄操注　佚（同五五回。他に楊玄操注釈音と思われる注音が二回）

③丁徳用注　佚（同七回。このうち丁得用」として一回）

④虞庶注　佚（同二回）

以上四家注本自体はいずれも亡佚しているが『王翰林集注黄帝八十一難経』（以下『集注』と略す）に収められており、幻雲注の引用文のほぼ同文が『集注』に見られるから、彼はそれに依拠したものと考えられる。とすれば幻雲の拠った『集注』は現行本の祖本である慶安五年刊本から百数十年遡ることになる。ただし幻雲注に「幻考楊本張本紀本范本熊本…」とあるから、元胤が『医籍考』でいうように楊玄操注だけは楊氏原本に依拠した可能性は残る。

⑤王宗正注　佚（同三回。この内「王氏曰」が一回。）

『医籍考』では「難経疏義」と題し、滑寿の『難経本義』は「難経註義」と題す。

⑥紀天錫注　佚（同三三回。このうち「熊引紀曰」として一回）

『医籍考』では『集注難経』と題す。元胤は「僧幻雲が史記附標は進難経表及び註説数十則を載す。弁論頗る精確たり」と評す。引用回数の多さは幻雲の信頼のあらわれだろうか。幻雲注では「紀氏曰」と「天錫言」と分けて引用している。それがどのような意味を持つのかは未詳。

⑦張元素注　佚（同一三回）

『医籍考』では「薬注難経」と題す。幻雲注の「張素注

難経に序無し」という記述は滑寿『難経本義』のいう「潔古氏薬注、疑うらく其れ草稿か。姑く章指義例を立つるも未だ書を成すに及ばざるなり」という指摘と符合する。幻雲のみた『薬注難経』も同内容の未定稿本だったのだろう。

⑧李駒注　存（同一回）

『新刊晞范句解八十一難経』。引用回数は最も少ない。

⑨熊宗立注　存（同四九回。熊宗立の注音は含まない）

『新刊勿聴子俗解八十一難経』。熊宗立は、当時わが国に最も強い影響を及ぼした人で、引用回数にもそれがあらわれている。幻雲の「熊氏俗解は紀天錫注を詳節する者なり」との指摘は、熊宗立注に紀天錫の注が多く引用されることから首肯される。

⑩高承徳注　佚（同三回）

『医籍考』は「難経疏」と題す。高承徳の生卒は明らかではないが、元胤は「紀天錫集注又其の義を駁す、乃ち承徳高の宋人たるを知れり」という。「其の義」とは高承徳の注を意味し、それは幻雲注の「天錫言…今高承徳言」という記述である。これからみれば高承徳は紀天錫以前の人であることがわかる。

こうしてみると、幻雲注には『難経』の佚注がかなり引用されていることがわかる。特に紀天錫注は頻繁に引用されているから、熊宗立の『俗解難経』所引の紀天錫注と併せれば、旧態をうかがうのは容易である。いずれにしても、幻雲注は『難経』研究に欠くべからざる資料としても貴重であることはまちがいない。

（北里研究所東洋医学総合研究所・医史学研究部）